

駐日ルワンダ大使が広島訪問

復興と心の平和に「感銘」

県被団協の母国での講演要請 坪井氏と対談



坪井理事長（左）の話を熱心に聞くルワマシラボ大使

原爆の被害を乗り越えてきた広島市民と平和、復興について語り合いたい。内戦、大量虐殺で約百万人も犠牲者を出した経験がある国、ルワンダのエミール・ルワマシラボ駐日大使（55）が六日、広島市中区の県被団協で坪井直理事長（80）と意見交換し、「ぜひ経験を母国で話してほしい」と要請した。

（梨本嘉也）

「核廃絶を訴えてきた」解放されるまでに四十年が、米国への復讐心から「もかかった」と明かす坪

井さん。三カ月間、生と死の間をさまよった被爆体験を大使は深くうなずきながらメモを取り、「心の平和がないと、世界平和は祈れない」というメッセージに感銘をうけた。わが国では隣人同士が殺し合っただけに、国民が得るものがない。ぜひルワンダに来て話を聞かせてやってほしい」と依頼した。

意見交換に先立ち、大使は原爆資料館を訪れ、前田耕一郎館長（77）の案内で、復興の過程などを聞いた。同国では内戦が大量虐殺に発展し、一九九四年四月から三カ月に及んだ。二〇〇〇年から新たな国づくりに向け復興が進む。「広島がどう復興を遂げたのか知りたい」という大使の思いを知っ

た南区の特定非営利活動法人（NPO法人）ピースビルダーズ・カンパニー（篠田英朗代表）が招いた。七日午後には大学生や市民との対話集會に参加する。